

“わたしの散道”

神峯山寺から本山寺

堀田 満



最初に本山寺に登ったのは小学校の五年生のとき、ツルリンドウが真紅な実をつける秋の終りであった。当時は終戦直後で、国鉄高槻駅から成合から川久保を通るコースを徒歩で本山寺まで登ったものである。その時は川久保で昼食、それからの登りの道傍に一町ごとに見ている道標の数字がだんだんと小さくなって行くのに喜びながら登り、本山寺に着いたのは三時頃であった。それから本山寺にはコースを変えて買った季節に何度となく登る機会にめぐまれていた。現在では、原から川久保に行く林道と、それから分岐する本山寺林道が整備されて、30分ほどで本山寺に登れる所まで自動車で行くことが出来るようになっていた。川久保まで市バスが行くようになっていた。また原までの市バスの回数も増えて、本山寺に登るのは、すい

ぶん気楽になってしまった。

国鉄高槻駅北口から出発する原大橋行の市バスに乗って、上ノ口から神峯山寺口から歩いて30分ほどで、神峯山寺に着く。神峯山寺の仁王さんのある山門を左に見て、川久保への林道を行けば本山寺であるが、神峯山寺にもちよつと寄って見よう。寺の裏山は、林床ヤダケが目立つが、一応まとまった暖温帯照葉樹林を代表するシイの林であるし、お寺の本堂の前にはカリシの本が植えられている。以前は本堂の前にはシダ類のヨハナヤスリも生育していたが、ていねいに除草をかけてはたぐさんのカエデ類が植えられ、新緑も紅葉もきれいな所である。

川久保への林道は北摂の山にもっとも普通のアカマ

ツ林やスギやヒノキの若い造林地の間を走り、やがて本山寺への林道の分岐点に来る。ここから本山寺林道の終点までは道の東側に代表的なアカマツ・コバノミツバツツジ・ソヨゴの混生したアカマツ林がある。以前はマツタケの良く出た所であるが、最近では駄目らしい。この林のソヨゴの枝にはヒノキバヤドリギが、またアカマツにはマツグミが寄生しているのが目につく。どちらもヤドリギ科の植物で、特にヒノキバヤドリギがこのように多数見られるのは北摂では珍らしい。終点の駐車場からは小豆坂と呼ばれる、古生層の風化した赤褐色のやや急な坂を登る。アカシデ、ウラジロガシ、アカガシなど北摂山地の五〇〇m以上ぐらいに多い樹が目立つようになるし、四月だったならダンコウバイやクロモジの淡黄色の花が、秋にはリユウノギタの白い花や、ツルリンドウの赤い実が目立つ所でもある。原大橋から登って来る道が合おう所まで来れば急坂は終る。この附近に大阪府下では珍しいオオスミヤマナシの大木が一本あったが、数年前に枯死してしまった。ここから本山寺まではアカシが多量なアカマツ林の尾根すじを通る道で、道の西側の谷を見おろすと、原上流の礫石場が真下に見られ、そのすさまじい破壊ぶりが見わたせる。尾根すじのアカマツは最近マツクイムシにひどくやられ、大部分は枯死したので、やがてアカガシの優占する林になるものと思われるが、どうなるか見守りたいものである。

本山寺は山奥の落着いた古寺で、最近訪れる人も多くなったが、本堂の前にはシヤクナゲ、オオイタヤノイゲツ、ホダイジュなどが植えられ、また二本のイ

チヨウの大木がある。このイチヨウはうまい具合に雄雌がそろっているので、秋にはイチヨウの実がいつもたくさんひろうことができる。本山寺の山門のわきには大きなアカシデの木があるし、その下の谷には、フツキソウの大群落がある。これぐらい大きな群落も珍らしいし、その間にはミヤコカンアオイやウバユリも見られる。また本山寺の附近は大阪府の自然保護委員会によって自然保護地域の第一号に指定された。寺の北側の斜面に立派なモミ・ツガ林が残っているから、本堂の裏には直径1m、高さ30mをこえるツガの大木があるのをはじめ、アカガンをまじえたモミ・シガの温帯針葉樹林が斜面の中腹より尾根にかけて分布している。谷の近くにはカヤノキ・ヤブツバキ・タマノミズキ・シキミが多く、良く保存された自然林の面かけが残されている。四月の初めには点々とタムシバの白い花が山腹をいろどるが、マンサクの鮮黄色の花を見ようと思えば二月の末の寒い時に登らねばならない。このモミ・ツガ林には色々な珍しい植物があるが、その中でも特筆すべきものはアオフタバランである。小さくて目立たないランであるが、大阪府下では珍品である。

本山寺では、おねがいをするれば宿泊も可能である。府下では他に見られないモミ・ツガの大きな林を見、さらにポンポン山まで足を延ばすのは日帰りでも充分であるが、一泊して本山寺附近の自然とゆっくり対面するのも良いことであろう。

(はった・みつる 鳥獣管理課)

